

長野県内新産地報告 (2)

竹重 聡*

はじめに

長野県は、大変広大な面積を備えた海のない県である。アルプスに囲まれた県内の扇状地は、三大河川信濃川、天竜川、木曾川によって海に流れ込んでいるものの、空から見た長野県は大きな盆地または強引であるがカルデラの中のようなでもある。そして47都道府県の中、太平洋と日本海に大河が流れ込むという、遙か昔から歴史の影響を強く受けてきた(目に見える回廊と見えない回廊の境界が出来ていた)、地域文化の全く違う行政が一つになった県である。だから昔からの集落つまり里山の地方によっての違いが出た。人々の生活多様性に変化が出た。里山と一緒に生活してきた我々が生き残るためには、脈々と受け継がれてきた歴史の下での伝統と文化と先祖を裏切ることなく、極力保全維持をしていくことが大切である。トキワトラノオはリニア中央新幹線が約20年先に完成したところ果たしてあるのだろうか。他の動植物も同じである。場所が変わっても同じである。ウロコノキシノブが堂々と国道で大きく育つわけがある。長野県は風力発電がない、火力発電がない、原子力発電がない、あるのは水力発電だけである。環境を変えることは即実行できるが、回復でなく全く以前のように元に戻すことは困難である。自然災害が時間をかけて自然治癒されるのとは違うのである。

植物と動物を通して、たくさんの方々にご縁をいただいて、いろいろな場面でお世話になった方々に心から感謝いたします。

1. ケヤマウツボ *Lathraea japonica*

新緑の季節、やや湿り気のある落葉樹林内に生えるゴマノハグサ科の多年草。自生地は本州(関東地方以西)、四国、九州。ブナ科などの木の根に寄生する無葉緑植物で、根茎は枝分かれして地中をはい、高さ10~30cmの太い花茎を直立し、穂のような総状花序を付ける。5月上旬ヤマウツボは、山小屋から離れた散策路上に生えていた。聖岳(3013m)麓の狭窄部の一部が平坦な谷となった場所で、標高



写真1. ケヤマウツボ

は1000m弱、山小屋を取り巻く急斜面にはブナ、ヤマザクラ、ミズキ等が自生し、周囲散策路を經由して聖岳登山道につながる。花は淡い白ピンク系でわずかに赤紫色を帯び、花冠の上下を軟毛が生え、短い柄がある。7本の花茎が立っていた。ヤマウツボの花冠の上唇は下唇よりずっと長く、萼は鐘形で4裂である。近くには無かったがブナの幼木が数メートル先に生えていた。県内では長野市・松本市波田・南木曾町・根羽村・泰阜村で標本報告、南信濃で調査報告。飯田市南信濃便が島7株。長野県絶滅危惧I B類。

2. タチガシワ *Cynanchum magnificum*

新緑の山地の大岩が積み重なった隙間の腐葉土が積もった斜面に、キノコの城のように直線上に点々と生えるガガイモ科の多年草。自生地は本州と九州、日本固有種。高さは花の頂点まで20~35cmと付近の岩やコケ類と馴染んでいた。葉は広卵円形で長さ4~12cmの大きな葉、茎の先に対生で集まり2から3枚。タチガシワの花冠は5裂し硬く、無毛で茶褐色から若干緑褐色。副花冠は小さい。茎頂部に花冠が集合し、さながら黒い玉飾りのようである。標高は1000m付近。10株の花茎が、斜面6~7m間に下から上に並ぶ。県内では諏訪郡富士見町で標本報

* 竹重 聡 〒381-2246 長野市丹波島2-16-3

告あり。飯田市南信濃便が島 10 株。長野県絶滅危惧ⅠA類。

3. トキワトラノオ *Asplenium pekinense*

暖地の低山帯下部里山のやや明るい山林中の湿った岩上または玉石積目地に生える、チャセンシダ科の常緑性多年草シダ。自生地は本州(関東地方以西)～琉球。葉の長さは 4~15cm。コバノヒノキシダに似るが全体が小さく葉の枚数が少なく、下部羽片が小さくなり、特に最下羽片は扇状になり対生が多くなる。また葉質はより厚く、黄緑から赤みを帯びた茶色で光沢がある。下伊那でのトキワトラノオは河原の玉石を積んだ目地の窪みに着生していることが多い。県内では泰阜村で標本報告、白田町で調査報告、天龍村で視認報告あり。大鹿村釜沢 23 株。長野県絶滅危惧Ⅱ類。

4. カタイノデ *Polystichum makinoi*

暖地の丘陵帯から低山帯下部里山のやや暗い山地林下で湿った斜面堆積土上に生える、オシダ科の常緑性多年草シダ。本シダは針葉樹の杉林に群生が多くみられる。自生地は本州(関東地方以西)・四国。葉の長さは 40~60cm。葉の表面には濃緑の金属光沢があり、葉質はオシダ科のシノブカグマより柔らかいが硬い。葉柄基部の鱗片は、披針形から広披針形、黒褐色で光沢がある。胞子のう群は、小羽片の中肋と辺縁の中間に着く。県内では長野市中条・天龍村・長野市若穂で標本報告、高山村水中で調査報告あり。長野市上野昭和の森公園 2 株。長野県絶滅危惧ⅠB類。

5. ウロコノキシノブ *Lepisorus oligolepidus*

ウロコノキシノブは低山帯下部のやや湿った岩上や樹幹に着生し、下伊那の遠山川流域及びその支流域、そしてごく一部の天竜川流域に産する、国内でこの地域だけに自生するウラボシ科で長さ 6cm~12cm、幅 2cm 前後、葉は深緑色で葉質は厚く、葉の裏面に黒色で宿存性の鱗片が多くつく常緑性シダ。民家の近くの古木で湿った太い樹幹、人家付近の河原の玉石積みの際間、古くなった石垣の苔むした表面そして古いコンクリート構造物の苔の付いた地肌、水道施設の濡れた黒ポリパイプの表面等を好んで生育する。里地里山を主な分布域とし、人間の生活に溶け込み、この地域特有の年間降水量県下一位高温多湿の気候風土を好むシダである。県内では天龍村・阿南町・泰阜村・飯田市上村・飯田市南信



写真2. タチガシワ



写真3. トキワトラノオ



写真4. カタイノデ



写真5. ウロコノキシノブ

濃・大鹿村で標本報告。飯田市上村4株。長野県絶滅危惧ⅠA類。

参考文献

- 大塚孝一(1987)長野県のシダ植物 信毎書籍出版センター
- 浅野一男(1992)天龍村の植物
- 岩槻邦男(1992)日本の野生植物 シダ 平凡社 東京
- 畔上能力(1996)山に咲く花 山と溪谷社 東京: 126・164
- 佐竹義輔 大井次三郎 北村四郎 巨理俊次 富成忠夫 (2003)日本の野生植物 草本 平凡社 東京: 48・18
- 竹重聡 (2003)ウロコノキシノブの自生地環境分布に応じた形状特性 長野県植物研究会誌 36: 85-92
- 竹重聡 (2003)長野県におけるウロコノキシノブの分布と生態への考察(1) 長野県植物研究会誌 36: 93-100
- 大塚孝一(2004)信州のシダ ほおずき書籍 長野: 24・128・141
- 上野勝典・上野由貴枝(2008)塩尻市の暖地性シダとカタイノデの生育状況 長野県植物研究会誌 41: 19-23
- 竹重聡 (2009)千曲川右岸杉林のシダ新産地の環境特性 ～イノデ類とイワヘゴの記録経緯と分布拡大を考える～ 長野県植物研究会誌 42: 51-62